

し1年3ヶ月にわたり自宅療養を続けることができた。これは訪問看護婦による適切な情報がスタッフ間で共有され、時間差を開けずに活用されたことが効果的であったと思われる。

15) 糖尿病患者における食後高脂血症の治療の意義 (第2報)

—Friedewald の式は食後でも成り立つか—

中村 宏志・中村 隆志(中村医院
内科)

【はじめに】我々は昨年、糖尿病患者の食後高脂血症(高TG血症)の治療が大血管障害の進展の抑制に有用であることから、食後脂質測定は有意義であると報告した。

【目的】空腹時に用いられる LDL 推定のための Friedewald の式 ($LDL=TC-HDL-TG \times 0.2$) が食後でも成り立つかどうかを検証した。

【対象と方法】当院に通院中の糖尿病患者 160 名(うち高脂血症83名)を対象に、空腹時および食後2時間に TC, HDL, TG, LDL を測定した。

【結果】空腹時では、Friedewald の式による LDL 推定値と LDL 直接測定値はほぼ一致 ($r=0.970$) し、食後2時間では、「Friedewald の式で求めた $LDL+10$ 」が LDL 直接測定値とほぼ同じ ($r=0.956$) であった。

【結論】食後採血で LDL を推定するためには、換算式を $LDL=TC-HDL-TG \times 0.2 + 10$ とするのが妥当である。

16) インスリン治療糖尿病患者への外来生活指導のための血糖自己測定に関するアンケート調査

稲岡 綾子・岩原由美子
渡辺 栄吉・梶井由美子(信楽園病院
栄養係)
佐藤美代子(同
同)
三留五百枝・佐藤由美子(外来看護婦)
山田 幸男・高澤 哲也(同 内科)

当院の栄養・看護外来では外来受診の糖尿病患者全員に栄養士・看護婦が同席して生活指導を行っている。SMBG 実施患者へは SMBG 記録に基づいて指導を行うが、QOL の向上により役立つ指導を行うために、現

状把握及び今後の可能性を探る目的でアンケート調査を実施した。

調査の結果、現状では医師から指示された通りの SMBG 回数やインスリン投与量の調節は十分に行われているといえた。しかし、QOL の向上への活用は十分にされているとはいえなかった。

栄養・看護外来では患者と情報を共有し合い、柔軟性のある指導を継続して行えるという長所がある。この長所を活かすことで、SMBG が血糖コントロールはもちろん患者の QOL の向上にも役立つものとなる可能性は大きい。そのためにスタッフ一同努力していきたいと思う。

17) 血糖自己測定を考える

八幡 和明・他(長岡中央病院内科・
検査科・看護科)

血糖自己測定がはたして有効に活用されているのかを検討するために患者アンケートを実施した。測定回数、タイミング、結果の記録やそれによる対応の変化、有用度、正確度、費用の理解、今後の継続希望などについて調査した。この調査で患者の理解や応用の仕方については十分でなく、今後個々の指導を高めていくことが必要であると痛感した。また各種血糖自己測定器を様々な条件下で検定を行なった。条件さえ守ればどの機種もほぼ正確であった。しかし温度条件、採血量など遵守すべきである。採血針の針先の培養では24時間放置した針でも無菌状態であった。しかし指先は結構汚染されていて、石鹸やウエットティッシュでは消毒は十分でなかった。アルコール消毒したものだけが無菌状態が維持された。やはり消毒は必要と結論された。

18) 後期高齢者へのインスリン自己注射導入

成田 操・松本 博美
倉井 佳子・高橋 純子(新潟市民病院
看護部)
小林 七栄(同
同)
田村 紀子・田中 直史(第二内科)
百都 健

【目的】高齢者のインスリン治療は老年期の特徴により導入を躊躇するケースが多い。当院の導入状況について調査した。[方法と対象] 1995年4月～1999年10月に入院した75才以上で血糖管理を主目的とし、日常生活動作が自立した患者62名のうち、インスリン自己注射を新規導入された患者15名を対象とした。これを習得困難